

浚渫船

葉山嘉樹

青空文庫

私は行李を一つ担いでいた。

その行李の中には、死んだ人間の臓腑のように、「もう役に立たない」ものが、詰っていた。

ゴム長靴の脛だけの部分、アラビアンナイトの粟粒のような活字で埋まった、表紙と本文の半分以上取れた英訳本。坊主の除れたフランスのセーラーの被る毛糸帽子。印度の何とか称する貴族で、デッキパツセンジャーとして、アメリカに哲学を研究に行くと言う、青年に貰った、ゴンドラの形と金色を持った、私の足に合わない靴。刃のない安全剃刀。ブリキのように固くなったオバーオールが、三着。

「畜生！ どこへ俺は行こうってんだ」

櫂の盆見たいな顔を持った、セコンドメイトは、私と並んで、少し後れようと試みながら歩いていった。

「ハッ、俺より一足だつて先にや行かねえや。後ろ頭か、首筋に寒気でもするんかい」

私は又、実際、セコンドメイトが、私の眼の前に、眼の横ではいけない、眼の前に、奴のローラー見たいな首筋を見せたら、私の担いでいた行李で、その上に載っかっている、

だらしないマット見たいな、「どあたま」を、地面まで叩きつけてやろう！ と考えていたのだ。

「で、お前はどこまでも海事局で頑張ろうと云う積りかい？」

と、セコンドメイトは、私に訊いた。

「箆棒奴。愚図愚図泣言を云うない。俺にや覚悟が出来てるんだ。手前の方から喧嘩を吹つけたんじゃねえか」

私は、実は歩くのが堪えられない苦しみであった。私の左の足は、踝の処で、釘の抜けた蝶番ちようつがい見たいになつていたのだ。

「お前は、そんな事を云うから治療費だつて貰えないんだぞ。それに俺に食つてかかつたつて、仕方がないじゃないか、な、ちゃんと嘆願さえすれば、船長だつて涙金位寄越さな

いものでもないんだ。それを、お前が無茶云うから、船長だつて憤るんだ」

セコンドメイトは、栗のきんとん見たいな調子で云つた。

そのきんとんには、サツカリンが多分に入っていることを、私は知っていた。その上、猫入らずまで混ぜてあつたのだが、兎に角私は、滅茶苦茶に甘いものに飢えていた。

だものだから、ついうっかり、奴さんの云う事を飲み込もうとした。

涎でも垂らすように、私の眼は涙を催しかけた。

「馬鹿野郎！」

私は、力一杯怒鳴った。セコンドメイトの猫入らずを防ぐと同時に、私の欺され易いセンチメンタリズムを怒鳴りつけた。

倉庫は、街路に沿うて、並んで甲羅を乾していた。

未だ、人通りは余り無かった。新聞や牛乳の配達や、船員の朝帰りが、時々、私たちと行き違った。

何かの、パンだとか、魚の切身だとか、巴焼だとかの包み紙の、古新聞が、風に捲かれて、人気の薄い街を駆け抜けた。

雨が来そうであった。

私の胸の中では、毒蛇が鎌首を投げた。一步一步の足の痛みと、「今日からの生活の悩み」が、毒蛇をつついたので。

「おい、今になつて、口先で胡魔化そう、つたつて駄目だよ。剥製の獣じやあるめえし、傷口に、ただの綿だけ押し込んで、それで傷が癒りや、医者なんぞ食い上げだ！ いか、覚えてろ！ 万寿丸は室浜の航海だ。月に三回はいやでも浜に入つて来らあ。海事

局だつて、俺の言い分なんか聞かねえ事あ、手前や船長が御託を並べるまでも無えこつちで知つてらあ。愈々どん詰りまで行けやあ、俺だつて虫けらた違うんだからな。そうなりや裸と裸だ。五分と五分だ。松葉杖ついたつて、ぶつ衝つて見せるからな」

松葉杖！ 私はその時だつてほんとうは、松葉杖を突いてでなければ、歩けないほどに足が痛く、傷の内部は化膿していたのだ。

私は、その役にも立たない、腐つた古行李をもう担いで歩くのが、迎も重くて、足に對して堪えられない拷問になつて来た。

道は上げ潮の運河の上の橋にかかつていた。私は橋の上に、行李を下してその上に腰をかけた。

運河には浚渫船しゅんせつせんが腰を据えていた。浚渫船のデッキには、石油缶の七輪から石炭の煙が、いきなり風に吹き飛ばされて、下の方の穴からペロペロ、赤い焰が舌なめずりをし、飯の炊かれるのを待っていた。

団扇うちわのような胴船が、浚渫船の横つ腹へ、眠りこけていた。

私は両手で顎をつつかつて、運河の水を眺めていた。木の切れつ端や、古俵などが潮に乗つて海から川の方へ逆流して行つた。

セコンドメイトは、私と並んで、私が何を眺めているか検査でもするように、私の視線を追っかけていた。

私は左の股に手をやって、傷から来た淋巴腺の腫れをそうつと撫でた。まるで横痃よこねでもあるかのように、そいつは痛かった。

——横痃かも知れねえ。弱り目に祟り目だ。悪い時や何もかも悪いんだ。どうなったって構やしない。——

「その代りなあ、淋しい死に方はしやしないからな」

私は、ほつれた行李の柳を引き千切って、運河へ放り込みながら、そう云った。

「おい！ そんな自棄を云うもんじやないよ。それよりも、おとなしく『合意雇止め』にしてやるから、ボーレンで一カ月も休んで、傷を癒してから後の事は、又俺でも世話をしやるからな。お前見たいな風に出ちや損だよ。長いものには巻かれろってことがあるだろう。な、お前がいくら頑張ったって、船長も云ったように、一億円の船会社にや、勝てっこないんだから」

セコンドメイトは、デッキの上と橋板の上とでは、レコードの両面見たいに、あべこべの事を云い始めた。詰らない事を云って、自分が疝癩玉の目標になつては、浮ばれないと

思いついたのだ。

「セキメイツ。長いものが、長いものの癖をして、巻かねえんだよ。巻かれた奴あ、ギユツと巻き締められて、息の根を止められちまわあな。ボーイ長（水夫見習）を見な。奴あ泣寝入りと云いたいんだが、泣寝入り処じやねえや、泣き死にに死んじやつたじやねえか。へツ、毛も生えないような、雛つ子じやあるめえし、未だ、おいら泣き死にはしねえよ。淋しい死に方なんざしたくねえや」

「フン。強い事あ、もつと早くか、もつと遅く言ったらどうだい。ま、足でも癒つてからな。第一、お前は船長に云う事を俺に云つたつて、追つかない話だぜ」

「いいとも。船長だつてお前だつて、塵木葉なんだよ」

私は、立ち上つた。

腰を下していた行李を担ぎ上げた。

セコンドメイトは、私が行李を担ぎ上げたので、二足許り歩いた。

私は、行李を運河の中へ、力一杯放り込んだ。

「へツ、俺等なあ、行李まで瘠せてやがらあ。ボシヤツてやがらあ。ドブンとも云わねえや。お前だつて俺だつて此行李と違やしないんだぜ。セキメイツ！」

行李は、ひょうきんな格好で、水を吸って沈むまでを、浮いてごみ屑と一緒に流れた。

「どうしたんだい。一体、お前気でも狂ったんじゃないのか」

セコンドメイトは、ポシャツと云った水音で振りかえってそう云った。

「首なし死体を投げ込んだんだよ。ありや腐った臓腑だけつか入ってねえんだ。お前だつて、あの行李ん中へ入ってるんだよ。俺だつて、自分の行李がいらなくなりや、雇止めを食わさあな、ヘツ。さようなら、御機嫌よう。首なしさん。だよ。ハツハツハハ」

私は、歯を食いしばった。そして上脛を上の方へまくし上げた。行李は私のようにフラフラしながら流れて行った。

セコンドメイトは、私が、どんなに非常識な事をいっても「憤ってはならない」と心の
中で決めているらしかった。

——若し、今、こいつに火をつけたら、ダイナマイト見たいに、爆発するに決ってる。

俺が海事局へ行つてから、十分に思い知らしてやればいいんだ。それまでは、豆腐ん中に頭を突っ込んだ鱈見たいに、暴れられる丈け暴れさせとくんだ。——

セコンドメイトが、油を塗った盆見たいに顔を赤く光らせたのから、私は、彼の考えを見てとった。

私とても、言葉の上の皮肉や、自分の行李を放り込む腹癒せ位で、此事件の結末に満足や諦めを得ようとは思っていなかった。

—— 一生涯！ 一生涯、俺は呪つてやる、たといどんなに此先の俺の生涯が惨めでも、

又短かくても、俺は呪つてやる。やつつけてやる、俺だけの苦しみじゃない、何十、何百、何万、何億の苦しみだ。「たとえ、お前が裁判所に持ち出したって、こっちは一億円の資本を擁する大会社だ。それに、裁判はこちらの都合で、五年でも十年でも引つ張れる。その間、お前は どうして食う。裁判費用をどこから出す。ヘッヘッヘッ」と、吉武有と云う、
 鑄込まれたキャプスタン見たいな、あの船長奴、抜かしやがった。抜かしやがった。畜生！「どうして食う？ どうして食う？」と奴はこきやがった。——

私は橋板上へ、坐り込んでしまった。

足と、頭の痛さだが、私を、私と同じ量の血にして橋板へ流したように、そこへ、べつたりへたばらしてしまった。

—— 畜生！——

「セキメイツ！ 人間の足が痛んでるんだ。分らねえか、此ぼけ茄子野郎！ 人間の足が、地についでる処が疼いてるんだ。血を噴いてるんだ！」

私は、頭を抱えながら呶鳴った。

セコンドメイトは、私が頭を抱えて濡れた海苔見たいに、橋板にへばりついて見ているのを見て、「いくらか心配になつて」覗き込みに来るだろう。「どうしたんだ、オイ、しつかりしろよ。ほんとに歩けないのかい」と、私の顔を覗き込みに来るだろう。そして、私の頭に手をかけるだろう。オイ。

——手だけは、未だ俺は丈夫なんだからな。ポカツ！ と、俺は、奴の鼻に行かなくちやいけない。口ではいけない。眼ならいくらかい。だが鼻が一等きき目があるからな。ざまあ見やがれ、鼻血なんぞだらしく垂らしやがって——

私は、本船から、艇から、棧橋から、ここまでの間で、正直の処全く足を痛めてしまった。一週間、全一週間、そのために寝たつきり呻いていた、足の傷の上にこの体を載せて、歩いたので、患部に夥しい充血を招いたのに違いなかった。

——どこにいるんだか、生きているんだか死んでるんだか知らないが、親たちが此態を見たら——

と、私は何故ともなく、両親の事を思い出した。

私の親が私にして呉れたのと、私の親ほどな年輩の世間の他人野郎とは、何と云うひど

い違い方だろう。

私は頭を抱えながら、滅茶苦茶に沢山な考えを、掻き廻していた。そして、私の手か頭かに、セコンドメイトの手の触れるのを待っていた。

私は、おそらく、五分間もそうしていた。だが、手は私に触れなかった。

私は顔を上げた。

私を通りすぎりに、自動車に援け乗せて、その邸宅に連れて行ってくれる、小説の美しいヒロインも、そこには立っていないかった。おまけにセコンドメイトまでも、待ち切れなくなつたと見えて、消え失せてしまっていた。

浚渫船の胴っ腹にくっついていた胴船の、船頭夫婦が、デッキの上で、朝飯を食っているのが見えた。運転手と火夫とが、船頭に何か冗談を云って、朗かに笑った。

私は静に立ち上つた。

そして橋の手すりに肘をついて浚渫船をボンヤリ眺めた。

夜明け方の風がうすら寒く、爽かに吹いて来た。潮の匂いが清々しかった。次には、浚渫船で蒸気を上げるのに、ウント放り込んだ石炭が、そのまま熔けたような濃い烟になつて、私の鼻っ面を掠めた。

それは、総て健康な、清々しい情景であり、且つ「朝」の澆漑さを持っていた。

船体の動揺の刹那まで、私の足の踝にジャックナイフの突き通るまでは、私にも早朝の爽快さと、澆漑さがあった。けれども船体の一と揺れの後では、私の足の踝から先に神経は失くなり、多くの血管は断ち切られた。そして、その後では、新鮮な澆漑たる疼痛だけが残された。

「オーイ、昨夜はもてたかい？」

ファンネルの烟を追っていた火夫が、烟の先に私を見付けて、デッキから呶鳴った。

「持てたよ。地獄の鬼に！」

私は呶鳴りかえした。

「何て鬼だ」

「船長つてえ鬼だったよ」

「大笑いさすなよ。源氏名は何てんだ？」

「源氏名も船長さ」

「早く帰れよ。ほんとの船長に目玉を食うぜ」

「帰る所なんかねえんだよ。ペイドオフ（馘首）の食いたてなんだ」

浚渫船のデッキから、八つの目が私に向いた。

「何丸だ？」

「万寿丸よ！」

「あんな泥船ならペイドオフの方が、よつ程サツパリしてらあ。いい事をしたよ」

彼等は、朝の潮に洗われた空気に相応しく快活に笑った。

それは、負傷さえしていなければ、火夫の云う通りであった。だが、今は私は、一銭の傷害手当もなく、おまけに懲戒下船の手續をとられたのだ。

もう、セコンドメイトは、海事局に行っているに違いない。

浚渫船は蒸気を上げた。セーフチーバルヴが、慌てて呻り出した。

運転手がハンドルを握った。静寂が破れて轟音が朝を掻き裂いた。運転手も火夫も、鋭い表情になって、機械に吸い込まれてしまった。

——遊んでちや食えないんだ。だから働くんだ。働いて怪我をしても、働けなくなりや食えないんだ！——

私は一つの重い計画を、行李の代りに背負って、折れた齒のように疼く足で、棧橋へ引返した。

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学全集・8 葉山嘉樹集」新日本出版社

1984（昭和59）年8月25日初版

1989（平成1元）年3月25日第5刷

初出：「文芸戦線」

1926（大正15）年9月号

入力：林 幸雄

校正：伊藤時也

2010年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浚渫船

葉山嘉樹

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>